

氏名	千葉 伸彦
ヨミガナ	チバ ノブヒコ
学位の種類	博士(音楽学)
学位記番号	博音第329号
学位授与年月日	平成31年3月25日
学位論文等題目	(論文) アイヌの歌の伝承をサポートするメソッド ー口頭伝承音楽の現代に適応した学習方法を探るー

論文等審査委員

主査	東京藝術大学 教授(音楽学部)	植村 幸生
副査	東京藝術大学 教授(音楽学部)	塚原 康子
副査	東京藝術大学 教授(音楽学部)	山下 薫子
副査	千葉大学 教授(大学院人文科学研究院)	中川 裕

(論文内容の要旨)

アイヌの伝統的な歌は、今日まで伝承が順調に行なわれておらず、その伝承内容は20世紀後半で大きく変容し、縮小した。現代の若い伝承者たちは古いスタイルの歌唱法に憧れを感じながらも、多くの人々がそれを自ら実現できないでいる。こうした状況の中、本研究は、伝承を活性化するための支援を行なうことを目的とした音楽学的な対応として、①アイヌの歌の構造および性質を明らかにすること、②「①」で得た知見に基づいた教育メソッドを作成すること、を研究主題とした。

まず、この事態を作った要因を考察により明確にし、社会構造、音楽環境、教育状況など7項目の要因を指摘した。それにより問題解決のための方向性として、音楽を構造的に捉え、それを教育するシステムの必要性を指摘した。次いで古い歌唱の旋律構造について、音声資料の聞き起こしなどによりそれを明確にした。アイヌの歌唱における本質的な意味や価値観を、伝承者への聞き取り調査や資料の調査に基づく考察および推論により明確化した。アイヌの歌唱旋律は、構造的には、「発声・音色変化」の要素、「音高変化」の要素、「節回し」により構成されることを明らかにした。歌唱の具体例は五線譜およびExcel譜(本研究において考案した楽譜形式)を用いて記述し、理解のため、また本研究の第二の目的である学習に供するための材料とした。アイヌの特徴的な節回しの技巧を、それを生成する基本的な動作で捉え、これをirekteと呼び、その用法を示した。発声法の疑問から生理学的な検証を行い、裏声とホイッスルボイスの中間に位置付けられる「第2の裏声」が存在する可能性を示唆した(斉田晴仁博士との共同研究による)。アイヌの歌唱の価値観の重要な部分が「楽しむこと」にある可能性を示唆した。以上により、アイヌの歌の構造および性質を明らかにし、同時に歌唱法の詳細を明らかにした。

上記に基づいて、学習方法を設定した。学習方法は研究途上からすでに何度も実施されており、実施の都度、学習者の反応に対応して行くことで、より効果的な学習の方法を考察した。以上により、現代における伝承に対する様々な阻害要因に影響されることの少ない学習方法を設定し、プロトタイプ(試案)として、21の項目にまとめた。また副次的なメソッドとして、発声練習の曲集を作成した。

以上2点の研究主題に対して結論を得た。後者の学習方法に関しては、今後メソッドの実施を重ねることによる発展が見込まれる。

(総合審査結果の要旨)

申請者は博士課程入学以前から長年にわたり、アイヌ音楽(声楽およびトンコリ)を古老伝承者から学びながらインタビューと採譜を行うとともに、その普及活動に取り組んできた。本論文はその集大成となることを企図したものである。論文の前半(第一章～第四章)ではアイヌの歌の旋律構造と発声法を、自身の収集資料および過去の音源を駆使して詳細に論じ、後半(第五章～第七章)ではそこで得た知見にもとづいて、アイヌの歌の伝統的な歌唱法を次世代に継承するための手順と記譜法を開発し、それに基づく教育的実践の報告を行った。本冊と別冊(3冊:採譜、発声練習、伝承者へのインタビュー)をあわせると計900ページに及ぶ大作である。

前半において特筆すべき成果は、アイヌの歌の旋律構造を「発声・音色要素」と「音高要素」から構成されるものとして、前者が後者に優越するほどの重要性を持つものとして、その精密な記述と分析を行った点である。特に、従来は区別がたてられていなかった裏声に、技法の異なる二種類が存在することを指摘した点、地声と裏声が交代する特徴的な節回しの一種を「イレクテ irekte」と呼んで、これをアイヌの歌の美意識に関わる技法と認めた点は、音色を考慮した旋律分析という新たな観点を内包する点で、民族音楽学に貢献し得る申請者の卓見とあってよい。また、フィールドワークから得られた伝承者の発言も、こうした分析の妥当性を裏付けるものとして、本論文において有効に参照されている。

この知見を生かして、後半ではイレクテをはじめとする独特の発声法を身につけ、アイヌの歌の楽しさと美的感覚を経験できるようになるための学習メソッドの案を、21の段階的なメニューからなるものとして提示した。またそのために、音色要素を考慮した新たな記譜法を開発し(これを申請者はexcel譜と呼ぶ)、五線記譜法と併用する形で教育プロセスに組み入れた。申請者自身が指導者となって進められているその教育実践は、それ自体がオリジナルな活動であり、すでに一定の成果を挙げていることが論文にも示されているが、その指導過程の詳しい記述や、この教育メソッドにおける指導者の役割に対する客観的な考察が欠けており、申請者の手を離れてもこの学習メソッドがどれほど有効であるかは、この論文だけからは明らかではない。また、現在行われている音楽以外のアイヌ文化復興活動(舞踊、言語、工芸など)との比較や、相互関連性の考察が含まれていれば、この実践のもつ社会的な意義をより明確に位置づけることにつながったであろう。

しかしながら本論文は、深刻な伝承の危機にあるアイヌ音楽を対象に、鋭い洞察力でその本質的要素を分析的に見抜いただけでなく、その分析の成果が伝承の活性化にも有効に機能し得ることを具体的に示した点において、申請者のオリジナリティがいかに発揮された、一種の応用民族音楽学的研究であると認められる。課程博士に値する十分な成果であると認め、合格と判断する。